

平成 30 年度 第 2 回
第三者評価検証委員会会議記録

確 認 欄	教育長	教育次長	係 長	係

日 時	平成 30 年 9 月 25 日 (火) 10 時 30 分～17 時 00 分		作成者 事務局 総務教育係 小林義尚
場 所	信濃町役場 公室 信濃小中学校 6 年教室	配付資料	会議次第、全国学力学習状況調査結果、質問紙調査結果、N R T 検査結果、就学決定及び特別支援教育体制資料、教育支援員会資料、ふるさと学習研究部資料、年間行事計画表、校内教員グループワーク結果表、学校行事資料、前回会議録
出 席 者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 竹内教育長、小松教育委員（午前中参加者） ・ 森本教諭、土屋教諭、佐藤教諭、中山教諭、赤池教諭、柳澤教諭（学校意見交換参加者） ・ 齋藤委員長、近藤副委員長、加藤委員、藤倉委員 ・ 勝野副校長、松木教育次長、小林総務教育係長 		
欠 席 者	なし		
内 容	検討内容	検討結果	
協 議 事 項	<p>1. 開 会</p> <p>2. 挨拶</p> <p>3. 協 議</p> <p>(1) 全国学力テスト及び N R T テストの結果説明</p>	<p>事務局：小林総務教育係長</p> <p>竹内教育長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 全国学力調査の結果が出た。学力調査の結果で毎年一喜一憂するのではなく、本当の意味での学びの定着ができる義務教育学校となるよう良い面と改善すべき点を検討していただきたい。 <p>学校：勝野副校長</p> <p>◆全国学力学習状況調査及び質問紙調査結果の説明</p> <p>①全国学力調査の結果 6・9 年生ともに上昇した。母集団が異なることから単年度では一概に判断できないが、全学年を通じて取り組んだ授業方法の「しなのスタイル」に一定の効果があったのではないかと。</p> <p>②質問紙調査の結果、家庭学習の時間が少ない傾向にある。</p> <p>③6 年生の社会や知らないことに対する興味関心、友達と学び合いについては高い傾向にある。</p> <p>④9 年生の将来の夢や目標を持っている率が、ここ数年低い傾向が続いている。</p> <p>⇒全体的に自己有用感、自尊心が低い傾向にあるのではないかと。【委員】</p> <p>◆N R T 検査結果の資料説明</p> <p>①N R T テストの結果、全国平均を経年比較すると相対的に学力は年々上昇</p>	

している傾向にある。課題は学年により学力差のバラツキがあること。

⇒4年生までは学級担任の指導力が大きく影響しているといえる。【委員】

(2) ふるさと学習
及び学校行事
の説明

学校：勝野副校長

◆ふるさと学習研究部資料、年間行事計画表、校内教員グループワーク結果表、学校行事資料により説明

①ふるさと学習は、総合的な学習だけでなく教育活動全般の中で地域素材を活用して学習することであり、「ふるさとイコール信濃町ではない」との意識で取り組んでいる。

⇒「ふるさとを信濃町としていない」と誤解を招くのではないか。ふるさと学習についての概念整理が必要ではないか。【委員】

②ふるさと学習によって探求力、思考力、判断力、町を考える力は養える。しかしその結果を数値化することは難しい。

⇒これからの社会で必要になる力や、ふるさとの原風景を持つことは、生きる力の原点となる。社会に出るうえで重要なことである。また、人は本能的に誰かのために役に立ちたいとの欲求を持っている。ふるさと学習を通じて「自己有能感」を育てることが重要ではないか。【委員】

③ふるさと学習の時間の確保が難しい。

⇒教科学習と結び付けることでより深い学習となり、学習時間も確保できるのではないか。子どもたちに何を学ばせ、何を身につけさせるかを吟味できると内容の精選が可能になるのではないか。【委員】

④信濃町にはふるさと学習の資源が多すぎて、人事異動で来た先生が、すぐに取り組むことが難しい。

⇒ストレスなく取り組める共通したカリキュラムが必要ではないか。【委員】

⑤通常の学校は、運動会は小学校のみ、文化祭は中学校のみ参加する行事だが、信濃小中学校は両行事に全ての児童生徒が参加するため、教科学習の時間に影響がある。

⇒教科学習を支えるものが何かとの基盤がないと授業時間だけを増やしても意味がない。むしろ小中一貫教育の良い面（学びの継続性・成長の過程が見える化できる）がもっとも分かる行事が、運動会や文化祭と考える。地域の方にもっと知ってもらえるよう工夫が必要ではないか。【委員】

⑥冬日課になると授業時間が6時間から5時間に短縮となるため必要授業時間の確保がギリギリになっている。

⇒授業時間のモジュールが初等部45分、高等部50分で異なっているのでそれらを改善したらどうか。学校行事を含め無理なく、分かりやすく、長く続けられるシンプルな方法に改善すべきではないか。【委員】

(3) 就学決定及び
特別支援教育
体制の説明

事務局：小林総務教育係長

◆特別支援教育の制度等の説明

①特別支援学級の在籍率が県内平均の約2倍である。

⇒特別支援教育の現在の課題は、高校進学後の支援である。特に自閉症・情

緒障害学級の生徒への高校進学を見すえた支援は、再検討が必要ではないか。【委員】

- ②通級指導教室とリソースルームによる学習支援を行っている。
⇒通常学級からリソースルームでの個別支援を一人ひとり取り出して行うのにはマンパワー的に限界がある。ユニバーサルデザインの授業方法を通常学級へ波及させるような仕組みへと変えていったらどうか。【委員】
- ③アシストルーム、中間教室による登校支援やリソースルーム、通級指導教室による学習支援を行っている。
⇒個別支援の場が様々あることで校内の仕組みが複雑になっている印象がある。先生方が支援の仕組みを十分に理解しているのか。【委員】
- ④関係者間での横の連携と、子どもの発達に合わせた支援を教育委員会の臨床心理士が中心になって行っている。
⇒卒業後の追跡調査や、高校入学後の支援体制を含めて考えたらどうか。また、特別支援学級から通常学級へどのくらい戻っているのかについてのデータ検証も重要である。【委員】

(3) 学校職員との
意見交換

参加者：森本教諭、土屋教諭、佐藤教諭、中山教諭、赤池教諭、柳澤教諭、齋藤委員長、近藤副委員長、藤倉委員、小林総務教育係長

- ①チャイムは8時45分、11時50分、14時の3回鳴らしている。
- ②清掃の実施時間は、他校では、授業が終わってホームルームの前に行う日程が多い、本校では、午後の活動をそろえるため、給食後に清掃をしている。
- ③5、6年生は50分授業なのでまとまった休み時間がない。
- ④校外での地域学習を行う場合、2時間続きで活動することが難しい。
- ⑤45分、50分の授業時間の違いで教科担任が大変。
⇒高等部も45分授業にしたらどうか。【委員】
⇒最後の5分で授業を振り返るので、45分にするのは抵抗がある。【学校】
⇒では初等部を50分授業にしたらどうか。【委員】
⇒1、2年生の2時間目の休み時間は大切。初等部は授業時間の違いやチャイムがないことに大きな不便を感じていない。【学校】
⇒大きな不便はなくとも小さなストレスや不便があるのではないか。【委員】
⇒中学生がテストの時に静かにするよう初等部が気を遣っているのが分かる。大きな問題は感じていない。【学校】
- ⑥これまでに初等部と高等部でこのような話合いをする機会がなかった。今回お互いの話しが聞けたので良かった。
⇒教職員同士が、お互いの困りごとや考えを話し合うことは重要。学期に1回でも話し合える場ができると良いのではないか。【委員】
- ⑦クラブ活動での地域人材の協力は、しなの学校応援団があるので、地域人材の確保はしやすい。ふるさと学習をサポートするコーディネーターがいると、もっと取り組みやすくなる。
⇒しなの学校応援団が、人材バンクとしての機能だけでなく、地域と学校を

	<p>(4) 今後の進め方について</p> <p>4. 閉会</p>	<p>繋ぐコーディネーター役を担えると、さらに良くなる。取り組みやすくなることで、何が先生や子どもたちに提供でき、どんな効果があるかなどの検証が必要である。【委員】</p> <p>⑧ふるさとイコール信濃町ではないと表現しているのは、ふるさと学習を単純に地域を学べば良いと考えてしまう先生がいるので、教科学習の素材として地域教材を活用してほしいと考えているためである。</p> <p>⑨特別支援学級など支援の場は多いが、関係職員の中では慣れているので問題はない。</p> <p>⇒「慣れる」ことで、人は問題点が見えにくくなる場合がある。本当に問題がないことなのか考える必要がある。【委員】</p> <p>⑩冬日課で5時間授業になるため、授業時間の確保が難しい。4時30分に出発のバスがあると冬日課でも活動の幅が広げられる。</p> <p>⇒統合に際して最も苦勞したのが通学対策だったのではないか。デメリットをメリットにする発想を持って、バスの時刻表の見直しをしたらどうか。【委員】</p> <p>①授業時間のモジュールが初等部と高等部で異なっていることは、大きな不便を感じていないが、小さなストレスがある。教科担任制を授業時間から検討が必要。</p> <p>②冬日課は、バスの時刻に合わせた学校運営をしている。そのため、授業時間を確保することが大変である。冬日課をバスの運行時間から検討が必要。</p> <p>③公立学校は、教職員の人事異動は避けられない。人事異動があっても着任した先生が分かりやすく、また、保護者や地域に分かりやすい9年間のカリキュラムをつくることが重要である。</p> <p>③特別支援の仕組みが複雑になっている印象がある。支援を受ける子どもと支援をする側が、無理なく、分かりやすく、成果のあるインクルーシブ教育のあり方の検討が必要。</p> <p>④運動会や文化祭は小中一貫教育の良さが、可視化でき、互いに伝わる行事であるとする。地域の方が、「見て」、「参加して」、交流できる場となり、児童生徒、教職員、地域が、互いに感謝の気持ちを伝えあう場になる行事の検討が必要。</p> <p>事務局：小林総務教育係長</p>
<p>次回内容予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5年生からの教科担任制とふるさと学習を含めた9年間のカリキュラムについて ・ 小学校と中学校の文化を融合する教職員同士のコミュニケーションと研修について ・ 配慮を必要とする子どもたちへの支援を含めた信濃小中学校独自の学校運営について ・ 信濃小中学校教職員との意見交換 	
<p>次回会議日時</p>	<p>平成30年11月5日(月)午前10時30分～</p>	